

子どもたちと

つなぐ伝統

10月21日、立川地区の「中三島神社秋季例大祭」が開かれ、内子町無形民俗文化財の「獅子舞」「社切り」「御供相撲」が4年ぶりに披露されました。地元集落の子どもたちが主役であるこれらの伝統行事は、令和元年を最後にコロナで中止を余儀なくされました。その間、児童数は年々減少。継続そのものが危ぶまれる事態となっていました。

再開にあたって協力してくれる子どもを募るため、立川小学校を通じて呼びかけたところ、ほとんどの児童が参加を希望。集落の垣根を越えて集まった小学生らによって、秋の境内にかつてのにぎわいが戻ってきました。今回の特集では秋祭りの様子と、伝統をつなぐ地域の皆さんの思いに迫ります。



待ちわびた「祭り」の風景



祭りの始まりを告げる鳴り物とともに境内にやってきた、華やかな衣装姿の立川小学校の児童たち。奉納する舞や演奏に地域の皆さんから大きな歓声が送られました。秋祭りでの子どもたちの活躍を紹介します。



社切り

祭りの日の正午、華やかな衣装をまとった子どもたちが行列となり、国道56号沿いの鳥居元御旅所から参道を通り、太鼓や鐘を鳴らしながら境内へ向かう。社切りの後には御供相撲、獅子舞、神輿、神職、総代などが続く



御供相撲

男子の健やかな成長を願い、川中地区の男子によって古来の形式で奉納される。行司に続いて、化粧まわしと下駄履き姿で力士たちが土俵入りする。行司は「東西東西、暫時が間、双方平一面に御静まりくださいませうぞや……」と口上を述べる



獅子舞

老夫婦、サル、キツネ、狩人、日本人の役を小学生が、獅子と囃子の役を大人が担当。物語は、老夫婦が農作業を邪魔するサルやキツネを追いかけるため、撃った鉄砲で獅子を目覚めさせてしまうというもの。獅子を納める狩人、日本人の口上にも注目





日之地社切り保存会
会長 井上 翔太さん

大変さもあったけれど、皆さんの支えで実施できた

社切りの再開は人集めからでした。現在、日ノ地地区には小学生がいません。昔のしきたりで大人は49歳までとされ、保存会のメンバーは4人のみ——。それでも地域の人から「伝統行事をやってほしい」という声があり、小学校への呼びかけで地域外の子どもたちが参加してくれることになりました。保存会OBの協力もあり、なんとか実施できました。

社切り

初の責任者として練習の日程調整をしたり、お接待をしたりと、大変さも知りました。地区外から来てくれる子どもたちが楽しめるような雰囲気も心がけました。みんな笑顔で立派に行列を進めてくれて、ほっとしています。大変さも知った分、今後も続けたいと簡単には言えませんが、皆さんに久々の社切りを喜んでもらえて、うれしく思います。



地域に根付くのは伝統と、守りたいという熱意——

守り継ぐ人たち

伝統行事の再出発には、伝統を守りたいと願う地域の皆さんの思い、そしてさまざまな苦労もありました。新しい挑戦となった祭りを振り返り、伝統芸能の保存団体の皆さんと、立派な舞や演奏で応えた子どもたちに話を聞きました。



本番の合間に衣装を整える

友達と楽しんだ初めての社切り

今年の社切り子は初めて挑戦する子ばかり。みんなでリズムを合わせるのが難しかったけれど、練習も本番も友達と一緒に楽しくできました。きれいな衣装を母が「似合ってるよ」と言ってくれて、うれしかったです。



西側 糸さん(立川小5年)

人と地域をつないでくれる祭りの良さを再認識

御供相撲には小さい頃から当たり前のように参加していました。獅子舞や社切りも同じように、秋祭りの行事のひとつとして参加する子どもたちは何となく誇らしげな気持ちだったように思います。そんな伝統行事がコロナで中止になったときは、とてもさみしい気持ちでした。今回、初めて女の子が行司として参加してくれました。口上を述べ、

御供相撲

最後を締めくくる大切な役割です。小さな子が一生懸命頑張る姿をみんなが応援してくれていて、私もうれしかったです。また地元出身の子が町外から手伝いに帰ってきてくれるなど、行事は人と地域をつないでいるものでもあります。4年ぶりにぎやかな雰囲気を地域みんなが喜んでいて、「やっぱり祭りはいいな」と改めて感じました。



立川三島神社御供相撲
代表 久保 秀文さん

楽しくやるのが一番——獅子舞を皆さんに知ってほしい

去年から保存会の会長をしています。20年ほど前に私が獅子役、息子たちが老夫婦役として親子で出演したのを思い出します。その時にしかできない経験なので、地区外から来てくれる子どももその親も、ぜひ一緒に獅子舞に挑戦してほしいです。練習は夏休み中から始まり、年によってメンバーも配役も変わるので、その時々で個性があっ

獅子舞

面白いです。お宮に来る人も年々減り、獅子舞を見たことがない人も思うので、できればいろいろな場所で披露して皆さんに知ってほしいです。役員はみんながうまく回るようにするのが役目。いやいややってもうまくいかないのが、楽しくやるのが一番です。大人たちが一生懸命楽しむ姿も、子どもたちの心どこかに残ってくれたらいいですね。



立山獅子舞芸術保存会
会長 名本 繁明さん

仙波 美咲さん(立川小2年)



みんなが優しく教えてくれた

行司の長いせりふを覚えるのに、たくさん練習しました。難しい言葉の意味は家族と調べました。大人の人たちが優しく教えてくれて、本番はうまく言えました。みんなに「頑張ったね」と言ってもらえてよかったです。



行司の練習をする仙波さん

明星 琉海さん(立川小5年)



地元の獅子舞が毎年楽しみ

1年生の時に日本人役、今年は狩人役をしました。地域の人が「もっと力強く」とコツを教えてくれたので、意識して練習しました。自分の地域の祭りも獅子舞も毎年楽しみ。次はおじいさん役にも挑戦してみたいです。



立川小学校での練習風景

ふるさとを思い起こさせる、大切な伝統——

祭りが子どもたちに伝えること

祭りを訪れた皆さんから聞かれたのは「子どもたちの姿に元気をもらえた」「この時期はやっぱり祭りじゃなあ」という声。その言葉からは立川地区の皆さんの、祭りや伝統行事を大切にする強い思いが伝わってきます。保存団体とともに立川地区の伝統行事の継承に取り組む武知修一さん。「地域で考え、行動することが大事」と思いを語ります。



川中三島神社
禰宜 武知 修一さん

子どもたちに残してあげたい
祭りの思い出と、心の原風景——

伝統行事の継続に危機感を抱き始めたのはコロナ前の令和元年。行事に参加する子どもが減り、自分たちの集落だけでは続けることが難しい状況となってきました。どうすればいいか話し合いをしていたところでコロナ禍となり、祭り自体を中止せざるを得なくなりました。集落の人たちは伝統行事に誇りを持ち「自分たちでやる」「人任せにはしない」という気持ちで強く持っていました。けれども「続けたいけれど、難しいかもしれない——」そんな雰囲気漂い始めていました。動きがあったのはその3年

後。「このまま何もしないわけにはいかない」と各行事の代表者と一緒に、小学校の参観日に合わせて保護者に伝統行事への協力をお願いに行きました。結局、この年もコロナのため実施には至りませんでした。今年5月に改めて学校へ。反対する保護者はなく、子どもたちが行事に参加してくれることに「——やってみたい」と声を上げてくれた子どもたちの存在に、大人も再開に向けた熱が徐々に高まっていきました。

に練習に参加してもらうには保護者の協力も必要。それでも「ぜひ参加したい」「貴重な行事を経験させてもらいたい、ありがたい」という声もありました。祭りを見る側でなく見せる側として、祭りの一員、そして地域の一員のような気持ちになれるのかもしれない。集落の人にとって当たり前になってきた行事が、外から見てもすてきなことなんだと再認識するきっかけにもなりました。

私も子どもの頃、祭りが待ち遠しく、御供相撲に参加しておこづかいで出店の綿菓子やおもちを買ったのが楽しみでした。行事の練習で友達と集まるだけでもうれしかったものです。今の子どもたちにも楽しい祭りの思い出を残してあげたいです。祭りや伝統行事の楽しい記憶が原風景となり、大人になってもこの時期になると懐かしく思い出し「また祭りに参加したい」という気持ちにさせてくれます。次は私たち大人が、子どもたちに伝えてあげたい——。それが祭りを続ける一番の動機です。ふるさとを思い起こさせてくれる大切な伝統を、これからもつないでいきたいです。

伝統行事を受け継いでいくために何を守り、何を
変えるかを考え、知恵を出し合う立川地区の皆さん。
地域に根付く伝統は、当たり前前のように当たり
前ではない個性であり、つなごうとする皆さんの地
域愛を育むものかもしれません。
子どもたちが経験した楽しい思い出は、きっとそ
れぞれの地域の風景や、行事を楽しむ大人たちの姿
とつながっています。あなたの思い出に残るもの、
そして子どもたちに残したいものはなんですか——